—身邊多事雜事—

奇妙な校長の馘り沙汰

大正十二年八月十六日の朝、商工實習學校の本館が燒失した。當時縣立三中が新校舍の完成まで、實習の校舍を借受け、事務室が本館の一室にあつた。三中の小使の不注意から火を發し、氣の毒にも、その小使がその室で燒け死をした。それから二週間過ぎて、所謂大正十二年九月一日の大震災で、殘りの校舍が燒けた。本館のみが火災の保險料が取れたので、その點では三中に感謝しなければならなかつたであろう。

震災後實習は立派な現在のコンクリートの校舍が新築された。職員生徒が泥靴のまゝで昇降するので、縣の當局から校舍内は泥靴ではいけない、是非上履にはき代へさせよとの命があつた。山本主事が度々縣廳まで呼ばれて、泥靴禁止を命ぜられたが、校長の私は聞き入れなかつた。主事は縣當局と私の中間に介在して、非常に迷惑であつたことは充分に察せられた。或日

横濱貿易新聞社の學校方面擔當の記者吉田昌興君が學校を來訪したので私は案内した。縣の學校方面の事をよく知つて居る吉田君のことゝて、私の顔を見て、泥靴のまゝで差支がないかと聞くから、結構ですと答へながら、實は泥靴はいけないと縣からやかましく云はれて居るのであるが、君の意見はどうかと聞くと、彼は言下に私に贊意を表した。然らば新聞に泥靴の一文を書いてもらいたいとて、その趣旨を述べておいた。

間もなく貿易新聞の第一面紙上に泥靴と題する記事が、相當な長文で記載せられた。それ以來學校の泥靴問題は消滅した。私は記念のため、泥靴の二字を揮毫して同君に呈したが、之が扁額となつて同君の玄關の間に掲揚せられて居た。

この様な風で、私と縣の教育當局との間は何事に依らずそりが合はなかつた。隨つて何かの機會に私を追ひ出したかつたことは、無理からぬ事であらう。所がその機會を教育當局はつかんだ。それは當時初めて縣立工業試驗場が設立せらるゝことゝなつたので、縣の工業發展のためにとて私をその所長に祭り上げ、實習校長を罷めてもらうことであつた。教育當局は、至極

妙案と考へ、當時の池田知事を説得してその同意を得、知事から私に交渉して同意を得ることになつて居た。然るに何かの手違ひから、知事から私へ何等の内談もなく、又私も知らない中に事件は進展して、實習學校の專任校長の俸給豫算と、試驗場長の兼任俸給豫算とが計上されて、縣會の參事會を通過して、本會議に提出の運びにまで至つた。之を聞き知つた私は大いに憤慨した。何の豫告もなく勝手に豫算の費目を變更して、學校長の地位を動かすことは、全く人間を馬鹿にして薪炭や筆墨同樣消耗品取扱をしたものであるとて、直ちに縣廳へ辭表を提出した。

驚いたのが縣の教育當局で、部長は直ちに私の宅へ馳せ付け、池田知事から既に内諾を得たことゝ思つて居たので、何分この辭表は撤回してもらいたいと懇請せられた。私は知事からその件に就いては、片言半句もお話を承つたことはない、全く人を馬鹿にして居ると、辭表を受取らなかつた。それから二三日の間、部長は學校に又銀行集會所に、私の後を追つて、辭表撤回を懇請せられたが、私は頑として應じなかつた。これは後から考へて見て、私は剛憤過ぎたと思つたが、縣と從來からの行きがかりで、勢其處まで行つたものであつた。

一日私は東京よりの歸途、車中にて日本カーボン會社の重役石川等氏（今の同社々長）に會つた。四方山の話の中に以上の事件を物語つた。石川氏は直ちにその話を以て同社の顧問辯護士で、縣會議員でもある染谷氏を縣廳に尋ねた。その夜は縣會の最終日であつたので、染谷氏の發議で、縣會は非常の混亂を極めたが、夜中近くになつて漸く多數を以て、專任校長豫算案が否決せられた。この事件と關連あつたか否やは知らないが、事件後十日立つか立たぬかの間に、教育部長は他縣へ轉出した。

その後にも又一つ事件が勃發した。實習學校の應用化學科が、石鹼製造工場を持つて居た。可なりの生産をするので、高工の記念祭の時に高工石鹼として販賣する製品は皆この實習の工場の製品であつた。製品の評判がよくなり、販賣も漸次開拓せられ、將來益々有望となつた。工場の主任は藏前高工出身の深井景二君であつた。深井君は中々の手腕家で、石鹼工場の萬事を切り廻はして居た。將來の騰貴を考へて、原料である濠洲産の牛脂を多量に買ひ込み時機を待つて居たが、案に相違して市價は暴落し、可なりの缺損が出來た。深井獨りではその處置が

出來なくなつた。縣の教育當局はこの時とばかり、苛酷にその責任を問うて打ち込んでくるので、私も逃げ道がなくなつた。

幸にも深井君の叔父の深井英五君は、日本銀行の理事（後の總裁又樞密顧問官）で、又同志社時代私の同級生であつたので、同君に相談して援助を仰ぎ、一方私の兼任校長俸給の辭退を申出で、石鹸事件を解決した。それ以後辭任まで私は無給で働らいた。縣の教育部は聊か溜飲をさげた事であらう。

減俸問題と濱口内閣への挑戰

昭和四年七月田中内閣總辭職の後を享け、濱口内閣が成立し我が校の商議員井上準之助氏は大藏大臣となり、金の輸出解禁を標榜し、その準備として國民の消費節約を要望し、官吏俸給の一割減案を閣議で決定した。減俸は官吏に對する一大痛棒で、司法省を初めその反對は各省

へ波及せんとして、世論囂々たるものがあつた。

或日、私は野村洋三氏に招かれて數學の安川、渡邊兩教授と共にホテルニューグランドで晝食の御馳走になつた。食事を終つたが、猶卓を離れず、雜談に花を咲かして居つたが、高工から私へ電話があつたので、早速電話口に出ると、首席の遠藤教授から、只今學校の食堂で職員一同相會し、減俸反對をいたし、全國の高工へ電報を以て減俸反對のため立つべく檄を飛ばしたので、事後乍ら一應御報告を致します、との至極簡單な通知を受けた。これは全く私には寝耳に水であつた。

友校に檄を飛ばして、減俸反對運動に加盟を促がす行爲は、時の政府に反抗する一つの政治運動で、學校行事としては決して小事件ではない。況んや校長を措いて、かゝる行爲に出ずるに於ておやである。假令その行爲は學校を代表としたものではなく、職員有志であるとしても、決して穩當なることではなからう。しかし檄は電流となつて全國の友校へ流れ飛んだ。矢は弦を離れた以上、今更ら何としても返へす法がない。電話を切るとその瞬間これは大事件ぢや、學

校長自身が全責任を負ふて立つより外に策がないと覺悟を定めた。覺悟をして見れば別に驚くことも不安もなかつた。悠々と食卓へ歸つて、學校も世間の渦巻きに巻き込まれ、減俸反對の狼火を擧げたらしいと、よそごとの様に電話の次第を述べて、更に食後の愉快な談話を續けた。

忽ちにして檄電が四方に飛んだが、神經過敏の政府の手廻しがよくて、郵便局で握りつぶされたらしかつた。直ちに警察に報告せられたとみえ、その夕方には既に文部省より電話があつて、私に明日早速出頭せよとの傳達があつた。

翌日私は遠藤教授に面會して、この問題は全部私が引き受けてやるから、君等は沈默して何等の運動をしない様にしてもらいたいと、約束して文部省へ出頭した。中川文部次官に面會すると何の事はない、私の顏を見るや否や、部下統率宜しきを得ないため、この問題を惹起したとて、頭ごなしに叱り飛ばされた。私も兼ねて覺悟をして居たから、別に驚きもしないし、僻易する筈もない。我輩は學校創立以來、部下の統率に關する限り、何一つ御迷惑を本省にかけた覺えはない。減俸反對運動は、學校長が自ら下を統率して起つて居るのであると抗辯して讓らなか

つた。次官が喧嘩腰で出られたから、ツイ私もツリ込まれて言葉が荒々しくなつたので、戸外に立聽く者が集まる樣になつた。當時の會計課長木村正義君が聞きつけ、次官室の戸を排して入り來り、先ず〳〵と居中調停の勞を取られたため、漸く靜かになつた。別れて實業學務局へ立寄ると、局の屬官連中から、減俸反對運動をよくやつてくれたと云はん許りに痛快がられた。

文部省を出て、その足で丸ビル三階の增田屋に、中村房次郎氏を訪ねた。これは文部省へ出頭するよりも、私には一層の苦痛な使命であつた。中村氏は學校の商議員にして、熱心なる學校の後援者である。同時に横濱に於ける民政黨の大御所でもある。反減俸運動は、民政黨内閣の一大苦痛で、しかもこれが中村大御所の關係淺からぬ學校で勃發したのであつた。私の顏を見るや、恐しい只ならぬ面相を呈した。私から本問題を切り出すと、怒るまい事か、遠藤を免官せしめよとか、終には高工を閉鎖するとまで憤慨せられた。

當時は警察行政はよく行き届いてゐたから、凡ての情報は政府は勿論のこと、政黨幹事にまで調査報告せられて居つた。又時の大藏大臣井上準之助氏も、高工の創立に因緣のある人で、

又當初からの商議員であつた。のみならず井上氏が正金銀行時代から、横濱市とも淺からぬ關係があり、大藏大臣として初めてその敏腕を揮ひつゝある際とて、濱の民政黨は有頂天になつて後援して居つた。然るに中村、井上兩氏が、この横濱高工が直轄學校として、減俸反對の魁として、起ち上つたことは、全く意外の事であつたであらう。中村氏の激怒も決して不思議でもなければ、又無理でもなかつたであらう。私は中村氏の當るべからざる苛責の言に對して、一語の辯解も、又答辯もせず、默々として時々頭を擧げて中村氏の顏を見て居つたのみであつた。大風一過を待つて、兎に角學校の重大事件であるから、一應の御報告をせずに居られないので、參上致しましたとの挨拶を述べて辭去した。

文部省へ出頭した翌日位かと思ふが、前文相岡田良平氏から親書を受け取つたので、早速岡田氏を小石川の邸に訪問した。岡田氏は氏の親友である某貴族院議員の事績を引いて、私を訓戒せられた。某氏は貴族院に於て、日露戰役の論功行賞に言及し、侃々諤々の論戰を張つたが、その口舌が禍をして、後日文部大臣に推薦せられたが、その機會を失したとて、その經緯を詳

細に説明せられて、官海游泳の術を懇切に教へられた。その上二宮尊德に關する漢詩二首を、料紙に書して私に惠與せられた。私は今も岡田氏の厚意は忘れられない。併し岡田氏の訓戒に從はなかつたためか、學校長以上の顯官に何人からも推薦せられなかつた。

減俸反對運動の火の手がまだ盛んに燃え上つて居る最中、私は中村氏に伴はれて三溪園で原富太郎氏に面會した。私は全く裁判所に呼び出された被告の樣な氣がした。三溪翁原氏は專ら教育者としての立場よりして、非難の論を向けられた。默して傾聽した。白頭中村翁は、政治的立場から、遠藤教授を罷免して、學校の肅正を迫るのであつた。私は溫良な被告らしく、從順な生徒の樣に、默々として多くを語らず、不得要領で釋放せられた。この樣な氣まづい事件があつたに關らず、事件落着後は光風霽月、兩翁の終息まで相變らず懇親を忝うした。とに角相當に油を搾られた。新井白石が彼が得意の時に五尺の小身總是膽と吟じたが、私も短軀ながら當時十八貫を超へて居つたので、五尺小身總是脂肪の觀があつたので、少々油を搾られた位では左まで苦痛を感じなかつた。

私としては、減俸反對運動をしたのか、反對運動の善後策をしたのか分らないうちに、さしもの減俸反對運動も、段々に下火となり、政府も一安心した。私も何かの形で、本省から譴責を受けることゝ覺悟して居たが、何の音沙汰もない。まさか不問に付せらるゝこともなからうと考へ、そつと探りを入れて見た。時の文部大臣は實業家出身の田中隆三氏であつた。實業界の表裏に、海千山千の驍將で、世間知らずで理窟ぽい校長や教授を相手にするのが面倒臭いとみへ、横濱のことは打ちやつておけ、あの校長は無邪氣な奴じやと云ふことであつた。文相は何が故に私を無邪氣な男と見たか私には分らなかつたが、とにかく實に有難い大岡越前守で、お蔭で私も又誰れも手傷を負はず、無事に事件が落着した。尤も私は學校長らしくない校長であつた事は事實であらう。學校では一度も職員會議を開かず、又事件の報告もしなかつた。その後屢々文部省で田中文相に面會したが、一言もお互にこの問題にふれたことがなかつた。併し文相の顏を見ると、今度は私の方から、無邪氣な文相である、文相らしくない文相であると云ふ一種の愛着心を持つ樣になつた。

赤化思想の侵入

昭和六七年頃、赤化思想は我國に氾濫し、當局の警戒は驚く程嚴重で、且つ神經的であつた。所謂危險思想は中等程度の學校まで侵入したため、不安の空氣が漲ぎり、教育者をして戰々兢々たらしめた。文部省からは頻々として指令が達せられ、これが阻止のため、色々な方法が講ぜられた。これがため妙な特別豫算まで計上せられることになつた。妙な豫算とは、學生を集めて會合を催す際の茶菓費である。有難い豫算か、ケチな豫算か考へ樣であらう。思想問題取締りのため、官制を改正して、實業專門學校に生徒主事と主事補を置くことになつた。其處で私は取り敢へず文部省へ出頭して、我が横濱高工では、生徒主事も、又主事補も必要なしと考へるからとて、辭退を申出た。所が本省ではそれは官制であるから、主事と主事補は是非置かなければならない、速かに適當なる人選をして、上申する樣命ぜられた。餘儀なきことである

から承諾して歸校した。

私の考へでは、實業專門學校では、思想の善導や警戒のため、生徒主事を置く必要がない。生徒間に自治の精神が旺盛である限り、下手な主事や、主事補があると、却つて平地に波瀾を起し易い。官制があると、妙な責任觀から何事かを目論見たい野心に驅られ易いからである。が學生の指導訓育の究極の責任は、校長自身が負ふべきである。文部省は何と云はれようが、我が横濱高工には、生徒主事や主事補は無用の長物であると、私は考へた。

其處で私は當時修身を擔當して居つた、大西友太教授を招き、生徒主事になつて貰ひたい、主事は官制上任命せられなければならないのである、併し主事の役は校長自身で勤務するからお氣の毒であるが、單に名義だけの主事に就任して貰ひたい。それでは御承知出來なければ、適當な他の方にお願ひするより外ないと相談した。大西教授は或は不滿であつたかも知れないが、兎に角承知してくれた。主事補は助教授本間淳治君を選定して、文部省へ上申し、夫々任命せられた。

この様な世相の中でも、我が高工は超然として、危險思想に關する限り武陵桃源の夢を見て居つた。處が一夕突然本間主事補が來訪した。面會すると、本間主事補は驚いた顏色で語り出す樣子を見て、私は只事でない事件の發生を予感した。果して予想に違はず、三人の學生が赤化事件のため警察へ拘引せられた報告であつた。私の應接は實に簡單であつた。これで我が校もやつと世間なみの學校となつた。委細は明日學校でお話を聞きますから、今晩は遲いからこれでお歸りを願ひたい、ご苦勞でしたと、別れた。

翌日學校の講堂に學生一同を集めて、三人の學生が赤化問題で、警察に拘引せられた經過を報告し、一同の警戒と注意を與へておいた。又職員一同へその報告をして、この際特に教室に於ても、實驗室に於ても、一層懇切なる指導教授を希望し、且つ本問題に就ては萬事校長に一任して貰ひたいと同意を求め、隨つて又本問題に關して、職員會を開催しないことも申添へておいた。それから警察や裁判所への交渉は、私と本間主事補の二人で奔走した。その中二人の學生は間もなく警察から解放せられ、殘りの一人は終に起訴されたが、僅か二ケ月位の後、我々の陳情を諒とせられ、起訴猶予となつて放免せられた。

横濱裁判所の檢事局から、父親に迎へられ、學校へ同伴した時、彼の同級生は化學實驗室で實驗中であつた。彼と彼の父親の周邊に集つた同級生から歡迎せられ、慰藉せられた時には、彼の父親の眼中には涙があつた。實にうるわしき光景であつたと、居合せた人から私へ報告があつた。

その後彼は無事に卒業し、或る會社に奉職したが、幾年も立たぬ間に、不幸短命にして他界した。彼の父親は相當な實業家で、私と東京の日本倶樂部の會員であつたため、懇意にして居つた。

赤化問題の序に、その當時あつた一珍事を記載してみよう。或る日私は校庭を何の用事もなく歩んで居ると、卒然として赤化運動が我校へ迫り來り、宣傳ビラを校内に今にも撒布せられると云ふ予感が、明らかに腦中に浮んだ。其處で大山會計、小林庶務の兩主任にその由を傳へ、校内を警戒すべく、秘密に依頼しておいた。兩主任は夫々部下の人達へその旨を傳へ警戒せしめた。兩主任も校長は妙な事を言ふものかなと、眞面目にもふれなかつたであらうが、兎に角

その晩は無事であつたことが、電話で報告せられた。

その翌朝猶警戒を繼續する樣依賴して、私は東京へ出張した。午後四時の予定の時間に横濱驛に歸着して、例の學校の自動車の置所へ歩を移して居ると、車中から本聞主事補が出て來て、私の顏を見るや、實に申譯がないが、今日正午と午後一時の晝食時間中に、かくかくの意味の赤化宣傳ビラが、校内に撒布せられた。警戒をして居たが、誰れも氣がつかなかつた。甚だ申譯がないので、態々報告の爲面會に來たとの事であつた。折角あれ程注意しておき乍ら、發見し得なかつたことを殘念に思はんでもなかつたが、私は何故に斯の如き予感が、私の腦底に湧き上り來つたことかと、不思議であると云ふ感じが一層であつた。警戒に當つた方々から、この不思議な予感に就いて問はれたが、私には答ふべき何物をも持たなかつた。それ以來私の退職まで赤化問題に就いては何事もなかつた。

學校と火災

本日（昭和二十四年十二月八日）の新聞に、縣立二高、千二百坪燒失、損害三千萬圓、ヤミの女の煙草の吸いがらから、と詳細に報道せられている。

戰災後建築物の特に貴重な折柄、千二百坪の校舍を全く灰にしたことは、縣民の一人として私は痛痕に堪へない。同時に直接關係のある同校職員及び生徒に對し同情に堪へない。

昨年であつたか、今年であつたか、確かのことは忘れたが、學校の火災が頻々たるに警戒して、文部省は火災を起した際は、その責任を問ふため、當該校長を馘ると内達したとの噂を聞いた。それかあらぬか、學校では各部屋の入口に火氣取締責任者の名札が嚴然として掲げられ、分擔して校舍警備の任に當らしめた。

實に法重心駭、威尊命賤。の感あらしむ。その後全國の所々で、相變らず學校火事があつた

が、馘られた校長があつたか、なかつたか、報道せられて居らない。

學校火災ばかりなく、一般に火災の原因の分らない時は、漏電や煙草の吸殻に歸して居るのは普通である。

私は著明な愛煙家として知人に知られて居る。事實その通りで、私の雅號まで煙州と號し、二六時中煙を吐いて居るので煙草から命名したものである。從つて人一倍煙草に愛着心を持つて居る。

火事の原因が煙草の吸いがらであると云ふ記事を見ると、忽ち煙草ファンの持前から馬鹿云ふな、と云ふ憤慨の念がこみあがつて來る。

縣立二高の火災記事を見ても、あゝ殘念な事をしたと思ふと同時に、煙草の吸いがらと云ふ字を見ると、又馬鹿を云ふなと、獨語することも禁じ得ないのである。

煙草の吸いがらは物を言はない、辯護は出來ない。何を云はれても、如何なる大責任を負はされても、默々として居る死灰である。それだけ私は彼に代つて、辯護をしてやりたくなる。

何人も吸いがらが火災を起したとて現行犯を取り押へたことがない。事後の推察に過ぎない。責任回避は慥かに人間社會の弱點であり罪惡である。吸いがらに關する限り、實に恥を知らない責任回避である。

專賣局の紙巻をふかしつつ、讀書でもしていると、忽ち火が消へる。ウカウカして居ると、一本の紙巻に三四本のマッチがいることがある。火を消さずに一本を喫み盡くすのは、可なりの努力を要する。こんな吸いがらで、何んで火災が起るものであらうか。萬物の靈長であると誇る人間様の常識なるものは、頻る變なものであると、吸いがらは嘲笑して居るかも知れない。茲に私は吸いがらのために辯護の勞をとり、多年の彼の冤罪を雪ぎ得るならば、私自身も聊か氣が晴れる氣分がする。

學校校舍は特に火氣に對して、危險にさらされて居ると云ふ譯がない筈である。木造の家屋は火氣に對して特に注意を要することは、火の用心と云ふ古來からの警戒の言葉に依つてよく示されて居る。然らば學校の火の用心は如何にせばよろしきやと云へば、私は人心の一致和合

が、第一義であると確信する。上は學校長より、下は受付小使給仕に至るまで、學校は自分の學校であり、又自分自身の家であると云ふ觀念にまで達して居らなければならない。又給仕小使に至るまで學校教育に參與して居ると云ふ矜恃を持つまでに自覺することが肝要である。此雰圍氣を作り出すことは、學校政治の要諦であると私は確信するのである。如何に火氣の取締が嚴重であらうと、職員全體が一致和合の美德に缺くる處があれば、火氣は其缺點をねらつて、何時其猛威を振ふかも知れない。眞に不可抗力的の火災は天變地變に依るものゝ外はないであらう。私も在職中火災を最も恐れた。風の夜はしばしば安堵して眠られなかつた。學校當直に電話し、火氣の取締を賴んだものであつた。今にして考へて見ると、滿十五年間在職中、ボヤの一度もなかつたことは、氣持の好い思ひ出である。親孝行で名高い孔子の弟子の曾子が臨終の床に門弟を呼び集め『わが足を啓け、わが手を啓け、戰々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如く免かるゝを知る』と云つた。

私は曾子のこの語を思ひ出して感慨無量のものがある。